

市民論文

～かわさき産業ミュージアム講座を受講して～

平成 19(2007)年 9 月 1 日から 10 月 14 日まで川崎市市民ミュージアム (以下「市民ミュージアム」) において「産業都市・カワサキのあゆみ 100 年—進化し続けるモノづくりの街—」という企画展があった。その 1 コーナーに御幸煉瓦製造所関連の書類資料や煉瓦の現物・鉄製銘板・書面には御幸村の鳥養仁一・野崎修太郎・秋元喜四郎、田島村中島の吉濱新右衛門等、川崎の初期に活躍した名士の名がある品々が展示されていた。これらは、いずれも増山兪一氏提供によるものだった。

この資料群は、増山氏の自宅に保存されていたもの、また敷地内から出土発見されたもので、このたび学術的な研究が初めて行われた。

本稿では、これまで詳しい事が分からなかった御幸煉瓦製造所製の煉瓦について紹介する。



図 1
川崎市市民ミュージアム企画展
「産業都市・カワサキのあゆみ
100 年—進化し続けるモノづく
りの街—」

1. 100 年前の煉瓦がでてきた

「さいわい歴史の会」の先輩である増山幸宏氏から、ある日「戸手の増山家が敷地内でアパート建設のため大きな樹を伐採し根を掘り出したところ、古煉瓦が沢山出たとの事。見に行かないか。」と連絡があった。我々だけで見るのももったいないので、市民ミュージアムへ連絡した方がいいのではないかと軽い気持ちで電話したところ、先方は大喜びで遺蹟・古墳担当の浜田晋介学芸員が飛んできた。増山家の御当主に御挨拶もそこそこに早速現場へ向い、穴の中へ入り調査した。

浜田氏はまるで古墳を発掘するように写真を撮り、寸法を測り、図も書いて 1 つずつ調査していった。刻印のある煉瓦が出ると、見ている我々も「なるほど、100 年前の古いものなので、このように記録するのか。」と感心するほどだった。後程説明があり「産業都市・カワサキのあゆみ 100 年 —進化し続けるモノづくりの街—」の企画があり現在展示の準備中との事だった。何個かの煉瓦の借用を申し込み、御当主と話し合ううちに、御幸煉瓦の資料が何かないかとの話になった。御当主が「こんな物ならある。」と言って持ち出してきた資料を拝見し、「これは第 1 級資料」と大喜び、これが企画展での御幸煉瓦製造所のコーナーになった。



図2 増山家での煉瓦発掘の様子（平成19(2007)年5月19日）

2. 謎だった分銅印の刻印

その後、市民ミュージアムの浜田学芸員が『川崎市市民ミュージアム紀要・第20集』に御幸煉瓦製造所についての論文を研究成果として発表している。それによると、横浜都市発展記念館の青木祐介研究員、(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの坂上克弘研究員が横浜古煉瓦の研究をしており、居留地・山手異人館・山下町周辺から古煉瓦を発掘し、その刻印から製造所を確認し成果をあげてきた。煉瓦には記号・文様・文字・数字などの刻印が押されている（全体的には押されていない物の方が多い）。この刻印は製造会社を表す社印と製造に関った責任印であると考えられている。

横浜市内で発掘される「分銅」印の煉瓦は永く小菅集治監製¹と推測されてきた。これは横浜開港広場で居留地時代の下水道マンホールが発見された際に煉瓦が採集されたこと、及び明治14(1881)年から明治17(1884)年にかけての横浜市の工事記録に「煉瓦の代金を集治監に支払った」という記述がある事による。

しかし、青木・坂上両研究員は平成17(2005)年以来の煉瓦を中心とする資料調査の集積から製造所は特定できないまでも、小菅集治監製ではないと考えている。これについては、横浜都市発展記念館で開催された企画展「地中に眠る都市の記憶」の展示図録の中でも触れている。

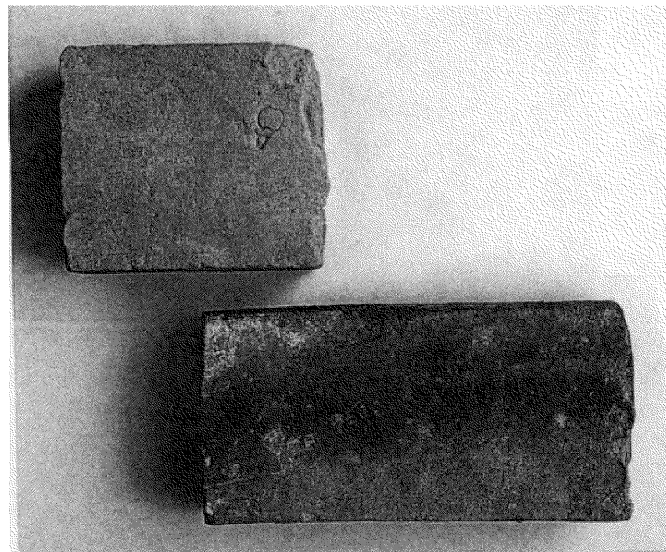


図3 分銅印の刻印をもつ煉瓦（横浜開港資料館所蔵）

出典：横浜都市発展記念館『地中に眠る都市の記憶～地下遺構が語る明治・大正の横浜～』

今回増山家から「分銅」印が押された煉瓦が多量に発掘されたが、これは、焼き損じの不良品で商品にならない物が製造元の増山家の地盤整備に使われたのだろう。こうした不良品の多量発見から、「分銅」印が押された煉瓦は、増山家が関わった煉瓦製造所の製品である

¹ 西南戦争で捕虜になった兵士を収監するため、小菅に集治監を造り囚人の作業として煉瓦を焼かせた。そこから、煉瓦産業は別名監獄産業と呼ばれるようになった。

と判断できる。また、「放射」印のある煉瓦は、会社広告に載った社章との相似から横浜煉瓦製造会社の不良品と考えて良い。したがって、「分銅」印と「放射」印の押された煉瓦は増山家が製造に関わった煉瓦製造所のものであるとほぼ特定できた。

こうして、浜田・青木・坂上の三者が合同の論文発表の運びとなった。

3. 御幸煉瓦製造所

川崎市が京浜工業地帯として発展した経過は、横浜精糖（後の明治製糖）・東京電気（後の東芝堀川町工場）が最初に進出し六郷川の舟運を利用して生産を開始、その後、日米蓄音機商会（後の日本コロンビア）・鈴木商店（現・味の素）と続き、その後は埋立地へ移り、日本鋼管（現・JFE スチール）・浅野セメント（現・デイ・シイ）というのが通説になっている。しかし最近では、それ以前に、もう少し上流の戸手町にドイツから輸入したホフマン窯で多量に煉瓦製造をしていた御幸煉瓦製造所が、近代工業の発祥と言えるのではないかとの説もでてきた。

御幸小学校の百年史『梅のかおり』では、川崎市内で初めての近代工業の工場は「御幸煉瓦製造所」として明治 21(1888)年御幸村字戸手に敷地一万坪の横浜煉瓦会社が建てられたと紹介されている。

当初は、小菅集治監の煉瓦指導者等に技術指導をうけ、初期は手抜き型で登り窯、四角形の煙突で旧式の設備で生産を始めたが、明治 31(1898)年に増山兎三郎氏個人の経営となり、機械抜き・ホフマン式の輪窯・コンペア駆動と粉炭使用による焼成が始められた。一窯 288,000 個の煉瓦を焼く事ができ、一窯焼き上げるのに 30 時間かかったといわれる。

原料は南河原・戸手あたりの真土・小向周辺の粘質土・小向仲野町から古市場にかけての砂混じりの土をトラックや馬車で運び込み、混合して使い、品質の完全な事と価格の低廉なことには定評があった。職工は 100 人で、完全な作業分担をして、年間 500 万個の各種赤煉瓦を生産した。この大盛況で「運搬馬車は終禪として四時絶えず」と資料にあるほどの好況のかげで、小向仲野町あたりは大きな穴が開いて残っていたという話も残っている。

大正 3(1914)年の『橋樹郡案内記』には、「創立は明治 21 年 4 月で横浜煉瓦製造所を 31 年 9 月に解散し、増山兎三郎氏の個人経営になって御幸煉瓦製造所となったが、同 36 年 2 月兎三郎氏の死去に伴い、子息周三郎氏が経営を引継ぎ、電動式(30 馬力)ホフマン式の焼窯を導入し此処で生産された煉瓦は水分が少なく堅牢と評判がよかった。この年までに採取した土量は約 30 町歩である」と紹介されている。また大正 2(1912)年度末の工業統計では従業員 32 名、販売金額 17,793 円となっている。

その一方、工場は村の共有地に進出したため、工場設立 2 年目から村長である河原治兵衛と村民代表（斉藤林蔵・深瀬佐吉・他 3~4 名の賛同者）との間に紛争がおきている事が川崎警察文書秘川乙第 48 号に残されている。

以上のような事があっても、明治 44(1911)年の『橋樹郡統計一覽』には橋樹郡で最大の生産高を誇っていたのは、明治 21(1888)年多摩川沿いに設立された横浜煉瓦製造所（後の御幸煉瓦製造所）との記事も見ることができる。

なお、明治後期より鶴見川沿いに煉瓦製造所が数社稼働していた。横浜港の第2期拡張工事新港埠頭・赤煉瓦倉庫等の建築ブームに乗って脚光を浴びてきたので、起業精神旺盛な人は川筋に粘性土を求めて其処此処を歩いたと思われる。増山氏と共同経営者は粘質土を探していたが、荒川筋は足立区の業者や小菅集治監に権利を上流まで抑えられていたため、多摩川に目をつけた。古多摩川の蛇行で地質を予見したのは創業者の勘か、それとも地元で田畑の性質を知っていたのか、土質を見抜いていた。

4. 増山一族

『川崎歴史人物辞典』によると増山周三郎氏は父仇三郎氏が設立した御幸煉瓦製造所を発展させ、橘樹郡郡会議員・御幸村村会議員にも選ばれ、市制になってから市会議員にも選出された。周三郎氏は、御幸小学校の新築費を寄付したり、御幸公園に明治天皇臨幸御観梅跡の碑を建てたりと地域のために色々尽力をしたが、大正の関東大震災の後、各地の煉瓦造りの建物は被害が多く地震に弱いと云う噂が広まり煉瓦製造所は消えていった。なお、増山家の墓所は幸区の延命寺にある。

5. まとめ

増山仇一氏は御幸煉瓦製造所の創設者増山仇三郎氏の子孫であり（我々の先輩である増山さんは御当主仇一氏が伯父さんと呼んでいたのが一族の方だったのかと後で気が付いた。）、自分の敷地内から多量の屑煉瓦（おそらく不良品で出荷できないもの）が発掘された。これまで、煉瓦工場の敷地は分かっており市民ミュージアムでも発掘調査をしたいと思っていたが、河川の堤外地は役所（旧建設省時代から）が厳しくて穴を掘る等は許可されず、又民有地が多いため問題解決には困難が多く困っていた所で確実な品が出たので、我々の想定外の研究材料となり、論文発表となった模様だった。詳しくは『市民ミュージアム紀要第20集』を参照されたい。なお、横浜都市発展記念館でも『地中に眠る都市の記憶』で市内各地で発見された煉瓦や西洋瓦について詳細な発表している。同好の士には興味ある書物だと思うので一読をおすすめする。

【引用参考文献】

川崎市市民ミュージアム『産業都市・カワサキのあゆみ 100年—進化しつづけるモノづくりの街—』平成 19(2007)年

川崎市市民ミュージアム『川崎市市民ミュージアム紀要第20集』平成 20(2008)年

横浜都市発展記念館『地中に眠る都市の記憶～地下遺構が語る明治・大正の横浜～』平成 17(2005)年

横浜都市発展記念館『西洋館とフランス瓦—横浜生まれの近代産業—』平成 22(2010)年

◆石田 勝俊

さいわい歴史の会会長。川崎区誌研究会、NPO法人かわさき歴史ガイド協会、横浜シネマトーク等に所属。